

風の旅

三浦哲郎

風の の 旅

三
浦
哲
郎

文藝春秋刊



風の旅

昭和四十五年十月三十日 第一刷

定価 五五〇円

著者 三浦哲郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 理想社印刷所
製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

風 の 旅

装幀
駒井哲郎

第一章

一

きのう、流吉は旅から帰った。

こんどの旅では、まず京都へいき、スケッチブックを持って二日ほど嵯峨野のあたりをぶらついて、それから舞鶴まで足を伸ばして、帰ってきた。

京都へは、もう何度かいったが、舞鶴までいったのはこんどが初めてである。

五日前、東京を発つ朝は、五月だというのに氷雨を思わせるような冷たい雨の吹き降りで、

私鉄の駅まで歩いていく途中、旅はよして引き返そうかと、何度も思った。

別段、旅先にさし迫った用事が待っているわけではなく、ゆうべ晩飯を食っている間にふっと思い立った気まぐれな旅である。なにもこんな冷たい雨に裾を濡らしてまで発つことはないのだ。

そう思って、けれども引き返そうかと思うたびに、家に残してきた妻や子供たちの顔が目の前にちらつき、するとなにやら、乳臭い温気のようなものがむっと顔の前に立ちこめるような気がして、彼は却ってそれらに心を急かされながら、とうとう私鉄の駅まできてしまった。

(いつもの通りだ)

改札口を通ると、首をすくめて雨ざらしの構内踏切をむこう側のホームに渡りながら、彼は心に呟いた。

(いつだって俺はこんなふうにして家から逃げ出していく……)

京都にきてみると、雨は降っていなかったが、空はどんよりとしていて、むし暑かった。前に二度ほど泊ったことのある鴨川べりの宿の二階の窓から、東山が垂れこめた雲のなかにうっ

すらと霞んでみえていた。

京都には、その日を入れて、三日いた。

二

あくる日、嵯峨野に出て、祇王寺の近くの竹林のなかに佇んでいたとき、彼は目の前で、ひよっこり風が生れるのをみた。

煙草に火を点けて、うっかりマッチ棒を落葉の積もっている地面に捨てて、あ、いけない、と気がつき、踏み消そうとして捨てたマッチ棒を捜していると、すぐ目の下の竹の落葉の一枚が、ひらと動いた。

とっさに彼は、その葉は炎に焙られて、反りかえったのだと思った。炎は落葉の色に紛れてみえないのだ。

ところが、そうではなかった。葉は黒くよじれることもなく、そのままひらひらと反転し、それから落葉の堆積の上を、ゆっくりとむこうへ転がり出した。すると、それに眠りを破られたかのように、あたりの落葉もかさこそと音を立てはじめ、その落葉のさざめきは次第に竹林

の奥の方へひろがっていった。

最初一枚が、竹の幹を駆け登るようにして舞い上ると、それを追って、あとから幾十枚もの葉がつむじを巻いてくるくると舞い上った。竹の下枝が揺れはじめ、やがて林のなかは、さわさと、葉という葉がそよぐ音に充ちた。

（いま、風が生れて、発っていくのだ）

と彼は思った。

風が梢をざわめかせながら、どこかへ飛び去ってしまうと、葉のさざめきも次第に収まり、林のなかはまた元の静けさに戻った。その静けさのなかを、新しい落葉があちこちで、かさ、こそ、と大きな音を立てて落ちた。

彼は、子供のころ、郷里の林のなかで、風が生れて、発っていくのを、何度かみたことを思い出した。彼の郷里は東北の北はずれだが、林のなかに膝小僧を抱いて坐っていると、目の前の枯葉が一枚、ひょいと立って、踊り出す。とみるまに、あっちでもひょい、こっちでもひょい、枯葉が立って、踊りがひろがり、やがて、それらがつむじを巻いて舞い上る。鈴なりのスグリの実が揺れ、幹に絡んだ葛の葉がひるがえりしているうちに、林の梢がこうこうと鳴りは

じめる。

子供の彼は、あの風はこの林を発って、どこへいくのかと思った。家のそばの櫓が鳴ると、あの風はどここの林で生れた風かと思った。

（あの風のように……）

竹林を出ようと、彼は歩き出しながら、ふとそんなことを心に呟いたが、あとの言葉が出てこなかった。彼は、自分はなにがしたいくてそんなことをいい出したんだろうと考えてみた。けれども、それは彼自身にもわからなかった。

（あの風のように……どうしたというのだろう）

そのとき、竹を縫って歩きながら、彼は背中に人の目を感じていた。それを意識したとき、彼にはすぐ、それが妻の目だということがわかった。けれども、妻がこんな場所にいるわけがない。それにも拘らず、それはやはり妻の目に違いなかった。

うしろから妻がみている、と彼は思った。出かけてくるとき、玄関のドアの蔭から俺を見送っていた妻の目だ。そう思った。

「気をつけてね。いってらっしゃい。」

声は陽気だが、そういうときの妻の目がある愁いに充ちていることを、彼は知っている。その目が背中に灼きついているのだ。

彼は旅先で、そんな妻の目を感じることがたびたびあった。たとえば、海岸の岩鼻で、足下に白く泡立っている荒海を見下している。ふと、背中に妻の目を感じる。滝壺に近く、両手で耳に蓋をして、降りかかってくる飛沫しぶきを浴びている。ふと、うしろから妻がみている、と思う。吊橋の上から、下の溪流を眺めている。その青く細い流れだけをみていると、やがて兩岸が川の流れとは逆の方向へ動き出すようにみえてくる。あ、岸が動いている、とその錯覚を楽しんでいると、うしろから妻の目が飛んできて、背中に貼りつく。

なぜ妻の目が、こんなところまで自分を追いかけてくるのか。それは、彼がなぜ家を逃げ出してくるのか彼自身にもよくわからないように、わからないことであった。ひょっとすると、妻の目が追いかけてくるのではなくて、自分の方で、ある瞬間、無意識のうちに妻の目を招き寄せているのかもしれない、そんな気もする。とにかく、彼が背中に妻の目を感じるのは、彼が家を逃げ出して旅に出たときに限られている。

家には、妻と二人の女の子がいた。

妻は、結婚して八年になるが、まだ三十前で、知らない人に子供が二人いるといっても本氣にされないことがしばしばである。結婚したてのころの初々しさはもうなくなっているにしても、まだ十分に若さを保っているといえる。健康で、二人目の子を生んでから、すこし太った。

二人の娘は、上が四つで、下はこの冬生れたばかりだ。

そんな妻子に、三十二歳の彼を加えた四人家族が、そう貧しくもなく、それかといって豊かだといえるほどでもない、平穩な家庭を営んでいる。彼の仕事は、子供向けの絵物語の絵を描くことだが、ときどきは雑誌の挿絵も描くし、たまには本の装幀もする。仕事は、忙しくもなく、そう暇だというほどでもない。

そんな毎日の暮しぶりから、彼が逃げ出したくなる理由を捜そうとしても、なにひとつみつからない。それは、彼自身の内部にあって、彼の家庭にはないからである。彼はなにかに追い立てられるのではなしに、自分で勝手に逃げ出すのだ。

ある日、たとえばさつき彼の目の前でひょっこり生れた風のように、ふいに彼の心のなかに得体の知れない風が生れる。心の底に埋もれていた自我の葉が一枚、ひらと動くと、それを合

図に、心のなかはさざめき立ち、ざわめき立ち、大揺れに揺れ、彼はいたたまれなくなって立ち上る。

「ちょっと、旅行してくる。」

「あら。」

妻は、彼の気まぐれには馴れているはずだが、いつもそう言って驚いてみせる。

「こんどは、どっちの方へ？」

「京都へ行ってこようと思う。」

きのう、彼はそういつて出かけてきた。

「お父ちゃんねえ、ちょっと、いつてくるんですって。」

彼が玄関で靴の紐を結んでいると、妻が背後で、上の子にそっくり聞かせていた。

「どこへ？」

「汽車に乗ってねえ、ちょっと遠いところ。」

妻は、ちよつとという言葉を、何度も使う。自分にいい聞かせるように。それから、彼にも

聞いてほしいかのように。

そのちよつとに、妻の願いがこもっていることを彼は知っている。

「じゃ、いつてくる。」

「いつてらっしゃい。気をつけて。」

「いつてらっしゃい。」と上の子もいう。

妻に抱かれている下の子の目は、もう彼を追うことが出来ない。上の子も、やがてオモチャのそばへ駆け戻っていく。妻の視線だけが背中に残る、ふらふらと大空へ迷い出ようとする紙凧を繋ぎ留める一本の細い糸のように。

(いま目の前で生れて、いずこへともなく飛び去っていった風のように……)

けれども、なにほどのこともない。彼はただ、妻の目の糸の強靱さを試すように、それを牽きながらしばらく歩いてみるだけなのだ。彼は、自分がまた何日かすればあの家に舞い戻っていくことを知っている、いつものように。娘にはコケシ人形を、妻には甘いものの包みを提げて……。

竹林から、楓の若葉が頭上を蔽ってトンネルのようになっていた坂道を、手の甲を蒼く染めながらくだって街道に出ると、雲の切れ間から西日が洩れて、雨がぱらぱらと落ちてきた。

三

三日目の朝、彼は大原の寂光院へ行ってみた。

寿永の昔、壇ノ浦に入水したが心ならずも助けられた建礼門院が、のちにこもったという尼寺である。死にたくて、死のうとして、死ねなかった女人の棲家ということに、彼は興味をそそられた。彼の姉たちは、もう二十五年も前のことだが、二人とも死のうとして、そうして死んでしまっている。

前にいちど、ここを訪ねようとして、バスで賑やかな団体客と乗り合わせ、途中で厭気がさして、詩仙堂のあたりをぶらついて帰ったことがあったが、この日は、いまにも降り出しそうな曇り空で、それに午前も早い時間だったせい、楓並木の石段を登っていきってみると、古びた本堂の前に憂い顔の若い男がひとり、ぼつんと佇んでいるきりであった。その男は、流吉をみると、瞬きをするようにして目をそらし、のろのろと庭の池の縁を巡って、左手の木立の陰に入ってしまった。

本堂の右脇に、ちいさな庫裏があり、その板壁に拝観料を書いた紙が貼りつけてあった。

縁先には、パンフレットや絵葉書の類を並べた台が置いてあり、座敷の戸は開け放ってあるが、どこにも人の気配がなく、しんとしている。

彼は仕方なく、本堂と庫裏を繋ぐ渡り廊下のところに立って、苔の青々としている中庭の方を覗いてみていた。すると、中庭に面した庫裏の廊下を、奥の方から、墨染の衣を着た背の低い太った尼が、ひっそりと歩いてくるのがみえた。彼はその廊下のはずれの、竹の木戸の方へ寄っていった。

「お待ちせいたしました。」

尼は、立ったまま両手を前に組んで、丁寧な頭をさげた。

「その木戸からお入りください。」

彼は、木戸を開けて入っていった。靴を脱ぎ、渡り廊下にあがると、

「どうぞこちらへ。」

彼は本堂をみせて貰うつもりだったが、尼は、庫裏の方へ彼を促した。すると、そっちにもなにか宝物があるのかもしれない、と彼は思った。そっちを先にみるのが、順序なのかもしれない。

尼は、先に立って庫裏の廊下をすこし歩くと、すぐ横手の障子を開けて、

「どうぞ。」

といった。

入ると、ふんと香の匂いがした。薄暗い、がらんとした部屋のまんなかに、細長い白木の机がひとつと座布団が一枚置いてある。みたところ、宝物らしいものはなにもない。

「どうぞ、お当てください。」

尼は、座布団を彼にすすめると、障子を閉めて廊下を遠去かっていった。

机の上に、ちいさな干菓子かんしを二粒のせた黒塗りの皿が出ている。障子の外で、笈かきの水音がしている。

しばらくすると、前の襖が開いて、やはり墨染の衣を着た尼がひとり入ってきた。抹茶茶碗を両手で暖めるように持っている。

「お待ちをいたしました……どうぞ。」

女は、髪を落してしまうと、わからぬものだと思つた。それがさつき自分を案内してくれた尼なのか、それとも全然別人なのか、見分けがつかなかったからである。いずれも若くは